

## 博士論文の要約

氏 名 高野 哲司

論文題目 近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用  
—東京都台東区谷中の事例を中心として—

庭は、人間が自身の欲求をもとに自然をコントロールした場所であり、人間と自然環境の関係のひとつの原型である。一方で、人間と自然が共存する環境を創出することが「にわ」の本質といわれてきた。本論文は、日本の都市の庭を対象として、庭の景観を構成している植物種の同定、植物の入手経路からみた庭の景観の形成過程および庭の植物利用の実態を把握することをおして都市空間における植物と人とのかかわり方を人間・植物関係学の視点から把握する。ここでは、住宅敷地内において植物が配置され、人と植物との関わり合いが認められる土が有る空間のことを「庭」と呼ぶ。

本論文は、6章から構成される。以下はその概要である。まず第1章では、先行研究、研究目的、研究方法に言及した。これまで、日本の庭の景観とそこでの植物利用に関する研究は農村や漁村を中心としたものが多く蓄積されてきたが、都市の庭の景観を構成する植物種の同定とその植物利用に関する研究はほとんどみられない。また都市を対象にした場合には、邸宅の庭園を中心に庭園の利用、居住者の生活のなかにみえる庭園観といった造園学の視点から行われてきた。谷中における庶民の庭の景観に関する研究はみられず庭の景観を構成する植物種に関する記述は断片的であった。第二次世界大戦前、戦後から現在に至るまでの庶民の庭の景観の形成過程、植物利用について実証的に示した研究はみられなかった。

本研究は、これらの研究動向をふまえて戦前から現在までの都市の庭の植物種を同定して庭の景観を復元するとともに住民による植物の入手過程やその利用の実態を把握した。筆者は、戦災を受けず過去の庭の景観を比較的今に残す東京都台東区谷中を主な調査地と位置づけ、比較のために兵庫県明石市の調査を行った。まず谷中では、庭の植物種を同定して、それらの利用に関する聞き取り調査を行った。同時に、居住者が過去に庭で撮影した個人のスナップ写真を分析することを通じて、居住者の人生の記憶と植物利用の変遷との関係性を明らかにした。

第2章では、東京都台東区谷中において、戦前における庶民の庭の景観について、一戸建て住宅の庭と長屋の庭の事例をそれぞれ提示した。前者は、ハラン等の常緑性の草本植物、カラスウリ等の庭に自然に芽生えてきた植物、トマト等の野菜類、カキノキ等の果樹類で構成されていた。後者では、ドクダミ等の庭に自然に芽生えてきた植物と木箱に植えられた植物から庭が構成されていた。木箱には、サンショウ等の薬味に用いる植物が中心に植えられていた。木箱には近所の溝で採集した草花が植栽されることもあった。

第3章では、戦後、とりわけ昭和30年代に庶民の庭で撮影された個人のスナップ写真に写る植物種と昭和30年代から残存する植物種を同定し、当時の庭の景観の復元を試みた。居住者は、ロウバイ等の戦前から庭に残存する植物を管理し、そこにライラック（白花）等の香りを放つ樹木、果樹を導入する動きがある中で、庭に自然に芽生えてきた植物も庭の構成要素として認めていた。庭に新たに芽生えた植物の場合では、庭から排除されることがなく、子どもの遊びに利用されていた。

第4章では、現在における東京都台東区谷中の庶民の庭の景観の実態について、個々の植物種を同定した上でその用途と入手経路の2つの視点から提示した。庶民の庭は、主に、居住者が野外から採集した植物、庭に自然に芽生えてきた植物、オモト等の縁起物や民間信仰に用いる実用的な植物から構成されていた。また、庭を構成する個々の植物の入手経路には、購入、贈与、採集があり、とりわけ採集には3つの形態があることを提示した。それは、谷中地域で植物を採集して庭に植栽する場合、故郷の思い出の1つとして、出身地から植物を採集して庭に植栽する場合、旅行などの際に採集する場合である。筆者は、庭に自然に芽生えてきた植物にも着目し、その利用方法をみることで、庶民が庭をとりまく周囲の自然環境との連続性を大切にしていることを明示した。

第5章では、地方都市である兵庫県明石市の庭の景観と植物利用の実態を次のように把握した。庭の景観は、主に、居住者が野外から採集した植物、庭に自然に芽生えてきた植物、野菜類、ホームセンター等に流通する園芸植物から構成されていた。また、庭を構成する個々の植物の入手経路には、購入、贈与、採集があり、とりわけ採集には2つの形態があることを提示した。それは、居住地域内で植物を採集して庭に植栽する場合、旅行などの際に採集する場合である。筆者は、庭に自然に芽生えてきた植物にも着目し、その利用方法をみることで、庶民が庭をとりまく周囲の自然環境との連続性を重視していることを明示した。

第6章では、まとめと考察を行った。本章では、東京都台東区谷中と地方都市である兵庫県明石市の事例を比較することで、近現代における庶民の庭の景観の変遷とその利用の実態を提示した。具体的には、庶民は庭に食用、薬用、民間信仰などに用いる有用植物を植えるだけでなく、観賞目的だけの植物も栽培していた。また、山野から採集した野生植物を庭に移植して庭に新たに芽生えた植物を管理して栽培していた。つまり庭が、野生植物を飼いならず場であることを明示した。さらに、2つの地域の事例から庭の植物を贈与することで人と人との社会関係を構築したり、庭に見られる植物にはライフヒストリーが刻まれていることから庭が植物の管理をしていた家族の記憶を想起する場となっていたりするなど、庭の社会的機能にも言及した。

以上のように本研究は、庭を構成する個々の植物の種類や利用方法を復元して庭の植物と居住者の人生の記憶との関連性について把握することから庶民はいかに都市の庭という空間に自然を取り込んでいるのかを明らかにした。植物の購入、贈与、採集など都市における庶民の庭の景観形成過程を明示した。この枠組みは、谷中と明石の両方で適用することができた。同時に、居住地域内およびその周辺地域に出かけた際や旅行などの際に野生植物を

中心に、野外で植物を採集し、庭に植栽するという「庶民のガーデニング」の実態を提示することができた。

本研究の学術的意義は、都市の緑地研究において、各世帯の植物種の選択の違いや多様な栽培方法（鉢植え、地植え、木箱）の組み合わせを通じて、私有緑地（複数の庭の集合体）の形成過程を明らかにしたことである。今後、公共緑地と私有緑地を合わせることで、都市における自然と人との共存関係を考えることに繋がると筆者は考えている。

しかしながら、本研究では、対象地点が限定しているために近現代における日本の都市の庭の景観とその形成過程の全体像を明らかにしたわけではない。本研究から生まれた研究枠組みは、他の地域の事例にどこまで適用することができるのか否かを検討することでより精緻な枠組みを構築していくことが今後の課題である。

なお、本論文では庭の植物に対する庶民の認知・分類の体系は分析できなかった。今後は、本研究で作成した東京都台東区谷中の庭の植物図鑑（138種類を記載）をもとに、彼らの植物に対する在来知の研究を展開していくと同時に現代における野生植物の栽培化や観賞化について考えていきたい。